



# 目次

---

A. 調査に協力してくれた人たち	1
B. 家庭状況	1
C. 住居と通学	3
D. 生活費の状況	4
E. 奨学金・授業料免除	5
F. アルバイト	5
G. 食事	6
H. 耐久消費財	6
I. 学内施設の利用	7
J. 入学と学業	8
K. サークル・ボランティア活動	9
L. 旅行	11
M. 健康・悩み	11
N. 進路（進学・就職）	12
O. その他	13

## A. 調査に協力してくれた人たち

京都大学の学部と大学院に在籍する学生を対象に学生生活の実態を把握し、キャンパス全般の環境整備に役立てるため、昭和28年以降『学生生活実態調査』を実施しています。すべての京大生のうち学部生から15人に1人の割合で、大学院生から7人に1人の割合で1,850人を無作為に抽出し、平成15年11月にアンケート調査を実施したところ、前回とほぼ同数の約44%に当たる819人から回答が寄せられました。調査に協力してくれた学生諸君に感謝します。

学部・大学院	学部	修士課程	博士課程	合計
総合人間学部	21	—	—	21
文学部・文学研究科	9	9	8	26
教育学部・教育学研究科	9	11	6	26
法学部・法学研究科	37	5	3	45
経済学部・経済学研究科	10	4	5	19
理学部・理学研究科	12	51	45	108
医学部・医学研究科	10	8	49	67
薬学部・薬学研究科	10	15	8	33
工学部・工学研究科	126	126	30	282
農学部・農学研究科	26	73	36	135
人間・環境学研究科	—	14	11	25
アジア・アフリカ地域研究研究科	—	—	4	4
生命科学研究科	—	13	12	25
地球環境学堂・学舎	—	0	1	1
合計	270 (32%)	329 (56%)	218 (52%)	817 (44%)

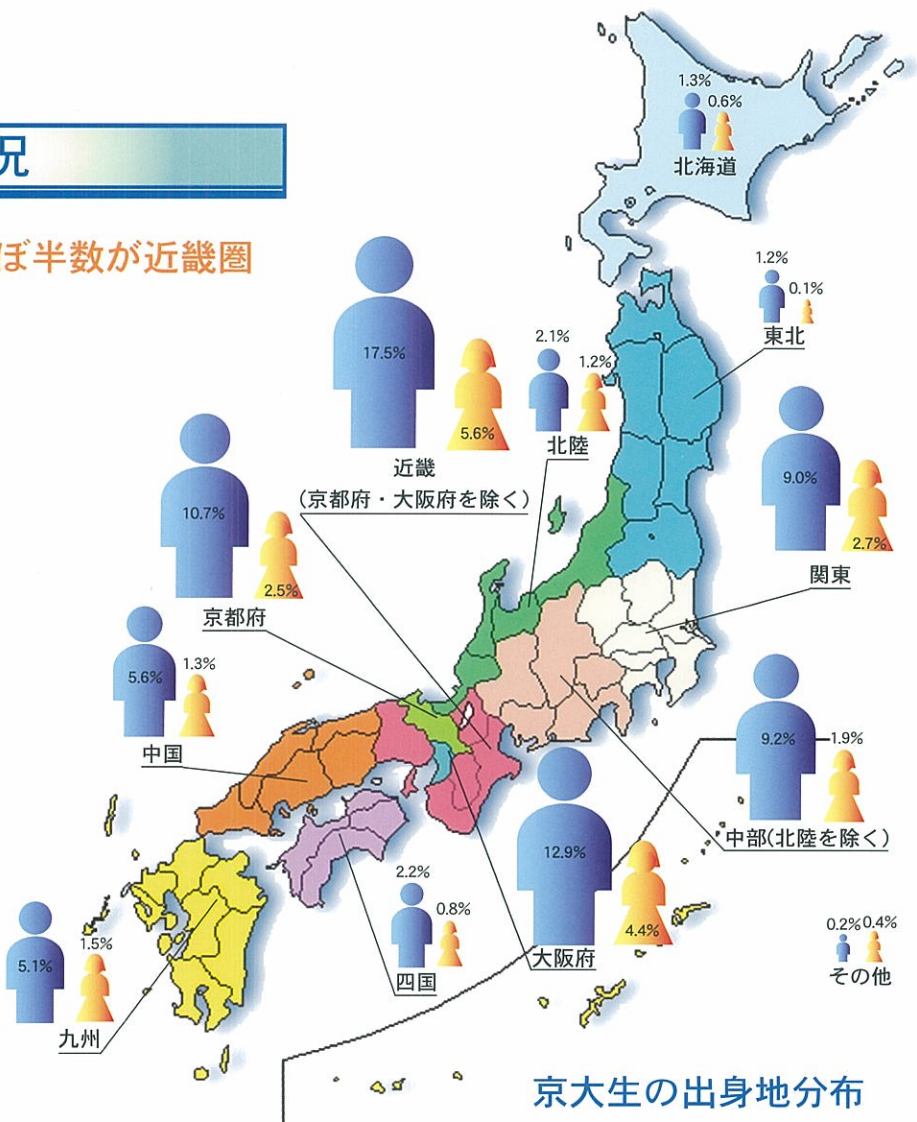
( ) 内の数字は回収率を表す  
 上表には、所属が不明な2名分は含まれない。  
 ※エネルギー科学研究科・情報学研究科は工学部・工学研究科に含む。

## B. 家庭状況



### 京大生の出身地は、ほぼ半数が近畿圏 女性の比率は上昇

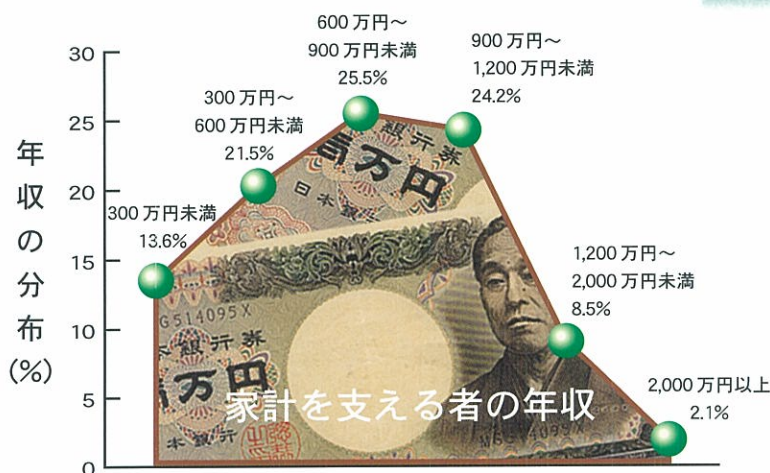
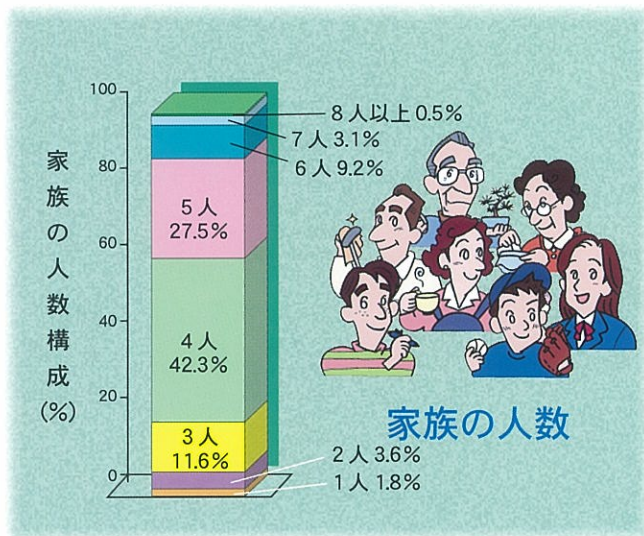
京大生を性別に見ると、男性76.9%、女性23.1%であり、5年間で女性の比率は5ポイント上昇している。年齢別分布は学部生で21～22歳(57.4%)、修士で23～24歳(68.3%)、博士で26～27歳(39.7%)がピークとなっている。また博士課程学生では30歳以上が同課程学生の21.7%を占めている。出身地は大阪府が全体の17.2%でトップであり、次いで京都府の13.2%となっている。京都・大阪に兵庫・滋賀・奈良・和歌山・三重を加えた近畿圏で全体の51.1%を占めたが、前回の調査に比べやや減少傾向を示している。





## 家族構成、年収は前回調査と変化なし

《家計支持者》、《年収》、《家計を支えるものの職業》については、不況の中でも前回調査と大きな変動は認められなかった。本人を含めた家族の人数構成は《4人》42.3%、《5人》27.5%、《3人》11.6%であり、全体の81.4%を占めていた。主に家計を支えているのは、全体では《父》と《母》で88.6%であるが、博士課程学生の場合は《本人》と《配偶者》をあわせると26.3%に達していた。また、主な家計支持者の年収は全体では《600万円以上900万円未

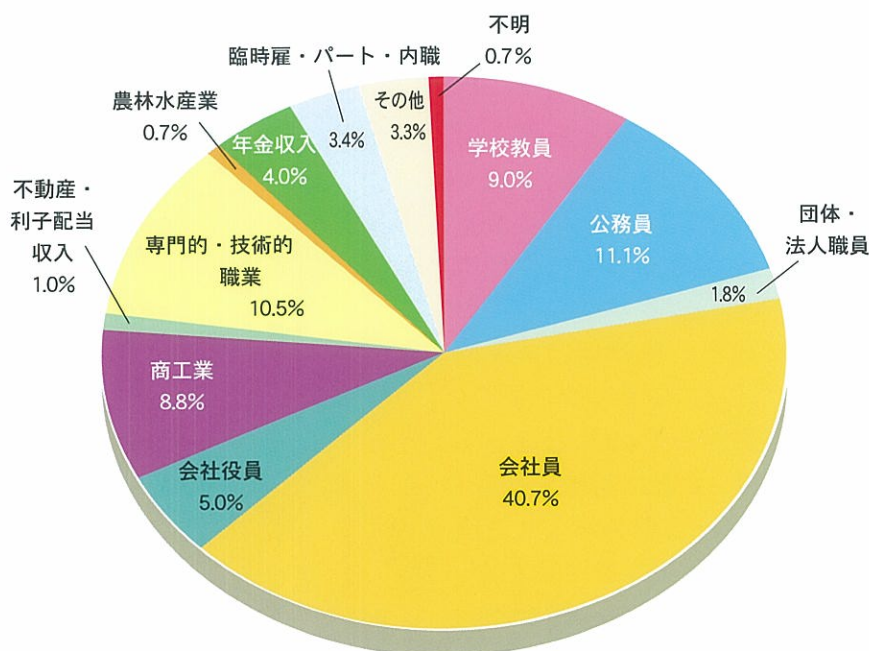


満》が25.5%、《300万円以上600万円未満》21.5%、《900万円以上1,200万円未満》24.2%であったが、博士課程学生に限定すると、《600万円未満》37.8%、《900万円以上1,200万円未満》21.7%の2つのピークが見られた。



## 既婚者は半数が子供持ち

学部生では既婚者は実数で1名(0.4%)のみであったが、修士課程学生では2.4%、博士課程学生では20.7%が既婚者であった。既婚者の子供の数は《いない》が44.6%、既婚者の2人に1人は子供を持っていた。5年前の調査で、《いない》が71%を占めていたのに比べると、大きく変化している。既婚者の子供の数は、《1人》が28.6%、《2人》が19.6%、《3人以上》が7.1%であった。

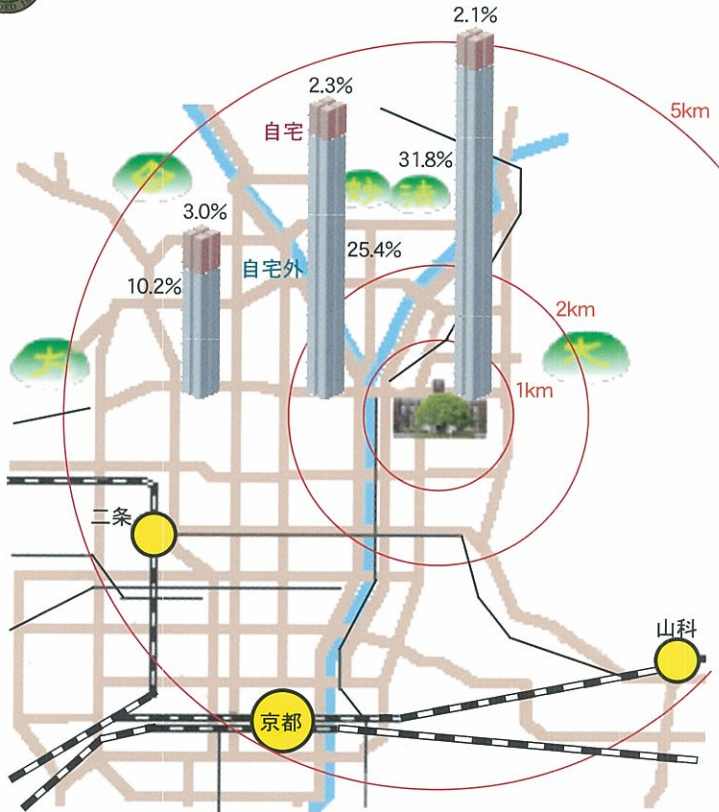


家計を支える者の職業

## C. 住居と通学



### 自宅外生はアパート・マンションに大半が居住



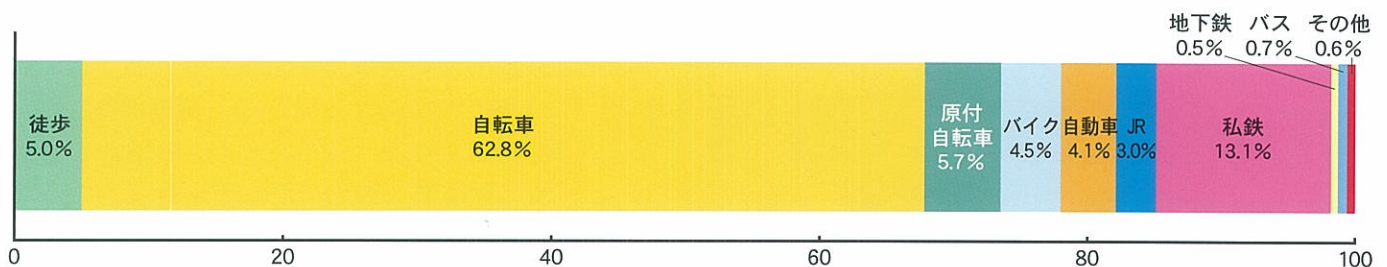
吉田キャンパスを中心とする通学圏

居住地域は吉田キャンパスを中心に2 km以内が京大生全体の61.6%を占めている。一方5 km以上離れた京都市内に住む者が7.4%と増加傾向にある。また、「京都府下」が2.9%、「大阪府、滋賀県、奈良県」が11.9%と前回調査に比べ若干減少している。京大生の75.2%は親元を離れて下宿生活を行っており、下宿生の住居は「アパート」あるいは「マンション」が全体の90.7%を占めるが、前回調査と同様である。その分、伝統的な住居タイプである「貸間」の割合が低下しており、「1人部屋」に住んでいるものが92.9%に達している。また、京都大学あるいは学外団体の学生寮に住居している学生は1.8%に過ぎない。平成15年度より工学研究科が桂キャンパスへ移転しており、今後学生の居住地などに変化が生じるであろう。



### 京大生の主な通学手段は自転車が主流

前回調査と同様、住居から大学までの主な交通手段に占める「自転車」の割合は依然高く(62.8%)、公共交通機関の利用者が17.3%となっている。また、通学所要時間は「30分未満」の者が77.3%と最も多い。京都大学の場合、市の中心地にありながら多くの学生が大学に隣接した地域に居住し、吉田キャンパスを中心としたひとつの学生街を形成している様子が窺える。



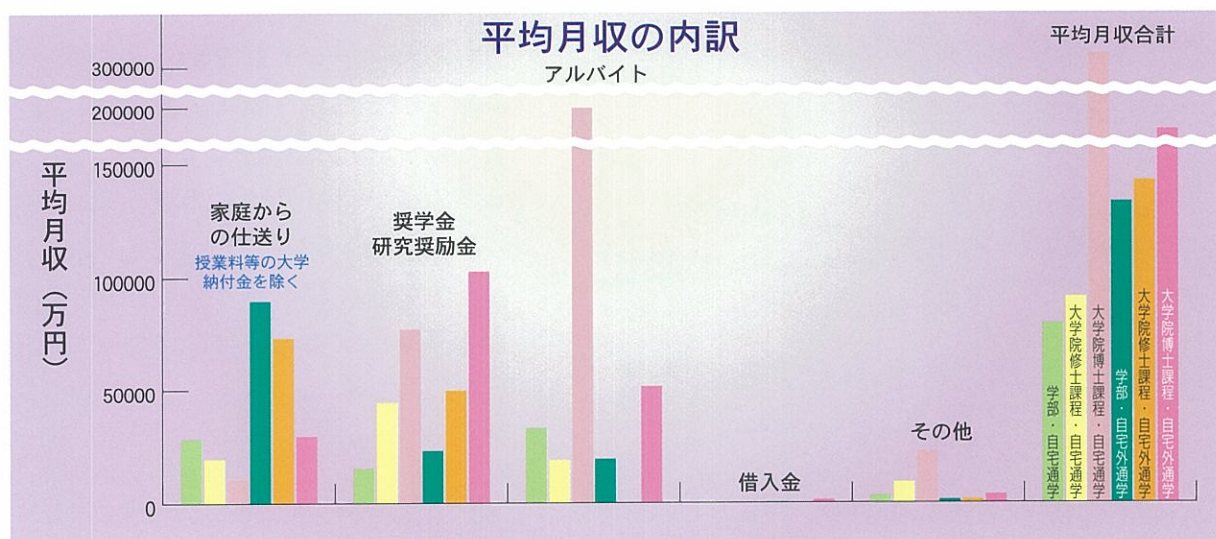
通学のための交通手段 (%)

## D. 生活費の状況

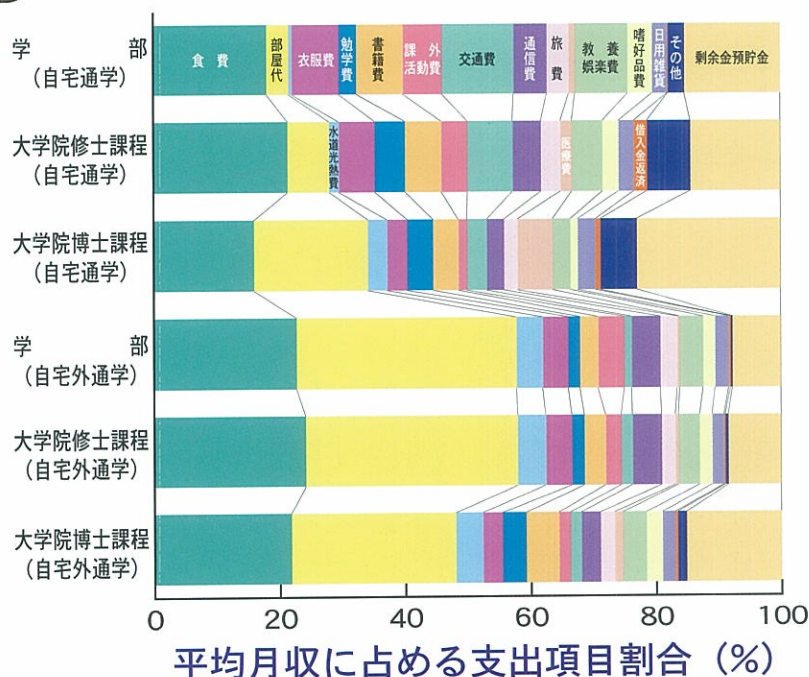


### アルバイト収入が増加したものの、奨学金・研究奨励費が減少

京大生の平均月収は、前回と比べるとアルバイト収入が増えているのを除けば、ほぼ横ばい状態である。なかでも博士課程は自宅通学者の平均月収が大幅に増加し、自宅外通学者は大幅減少している。この理由として博士課程の自宅通学者のアルバイト収入が増えたことと博士課程自宅外通学者の奨学金、研究奨励金が不況下の企業の状態が反映しているのか大幅減少したためと思われる。また、学部生の場合、《家庭からの仕送り》は前回の6.6万円から今回は7.5万円へとやや増加しているが博士課程と同様に奨学金、研究奨励金が減少している。逆に修士課程の《奨学金、研究奨励金》はやや増加の傾向である。《家庭からの仕送りのみで勉学可能》と答えた割合は35.1%と前回とほぼ同じである。学部生、修士課程は《アルバイトを増やしたい》と考える学生が多く、一方博士課程の学生はアルバイトよりも《奨学金・研究奨励金を増やしたい》と考える学生が多い傾向である。全体的に《家庭からの仕送りを減らしたい》と回答している学生の比率が高いが、実際には不明者が71%にも登る。



### 食費、部屋代を節約し、書籍費、教養・娯楽費を確保へ



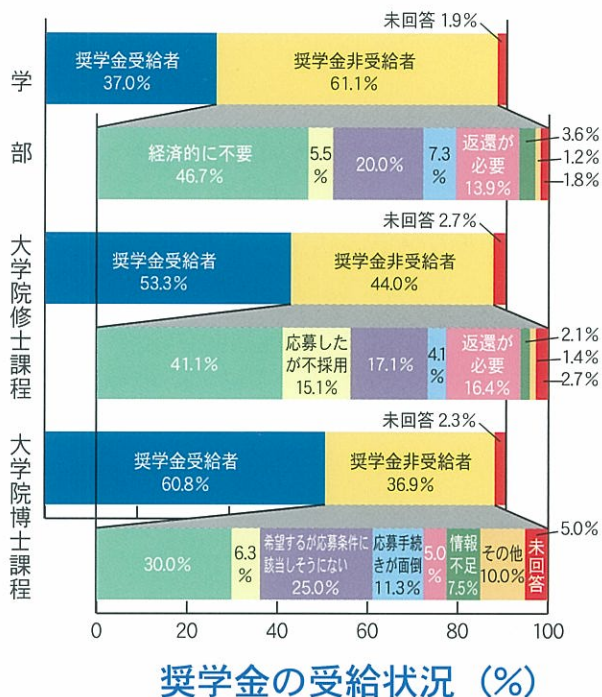
毎月の生活に必要な基礎支出（食費・部屋代・水道光熱費）は、支出全体の52.8%を占めているが、前回調査と大きな変化はなかった。また、《剰余金・預貯金》は平均で2.0万円とやや増加していた(前回1.5万円)。支出のうちで減らしたい項目では前回と同様に《食費》で次いで《部屋代》、《通信費》を挙げており、増やしたい項目では《書籍費》、《教養・娯楽費》、《奨学費》の順となっている。前回同様、収入減への対応として基礎支出を節約しながら、書籍費や教養・娯楽費を確保しようとする傾向が窺えた。

## E. 奨学金・授業料免除



### 京大生のほぼ半数は奨学金を受給、 授業料免除者が大幅に減少

奨学生の割合は京大生全体では49.8%とほぼ前回(51.2%)と同じであるが、学部生では前回の47.7%から37.0%へと減少し、大学院生では前回49.3%から53.5%に増加した。また、《利子なし奨学金》の受給者の割合が61.5%から69.8%へとやや増加し、その分、《利子つき奨学金》の受給者の割合が34.2%から22.9%に減少した。授業料免除については、全額免除者の割合が前回調査の8.6%から5.4%へと減少し、特に博士課程学生の場合は14.6%から7.8%に半減した。また、出願したが不採用になった者は前回の13.9%から10.0%へと減少した。

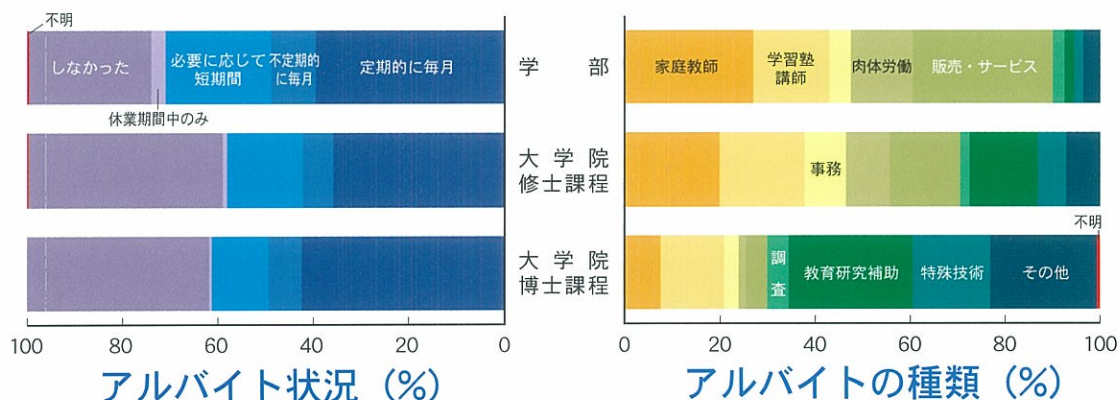


## F. アルバイト



### 定期的なアルバイトは減少傾向に

アルバイトを《定期的に毎月した》者の割合は前回の48.0%から38.7%へ減少の傾向を示している。アルバイトの職種では学部生、大学院生とも《家庭教師》《学習塾講師》の割合が高かった。また、大学院生では《教育研究補助(TA)》および《特殊技術》の割合も高かった。アルバイトの月平均就労時間はほぼ半数の者が20時間未満であった。アルバイトの紹介先では、《友人・知人・先輩》が40%程度であったが、大学院生については、《教官》が紹介者となった割合が修士課程で18.4%、博士課程で38.8%あり、《教育研究補助(TA)》および《特殊技術》については教員が紹介者となっていることが窺える。アルバイト収入の使途に関しては、学部生は《衣食住の費用》に50%程度、次いで《教養・娯楽費》に23%程度を充てているが、博士課程では《衣食住の費用》に75%程度、次いで《教養・娯楽費》は3%で《勉学費》に16%程度を充てていた。また、アルバイト経験に関しては60%程度が《人生(社会)経験が得られ有意義であった》と回答しているが、アルバイトと学業の関係では《支障があった》と答える学生は40%もいた。



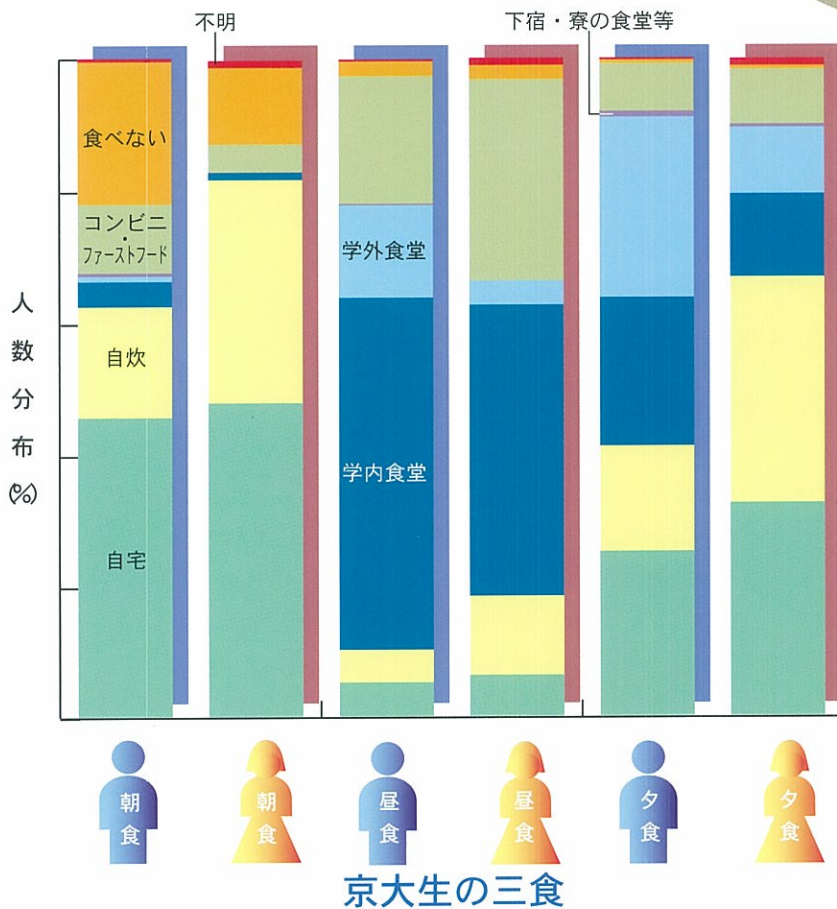
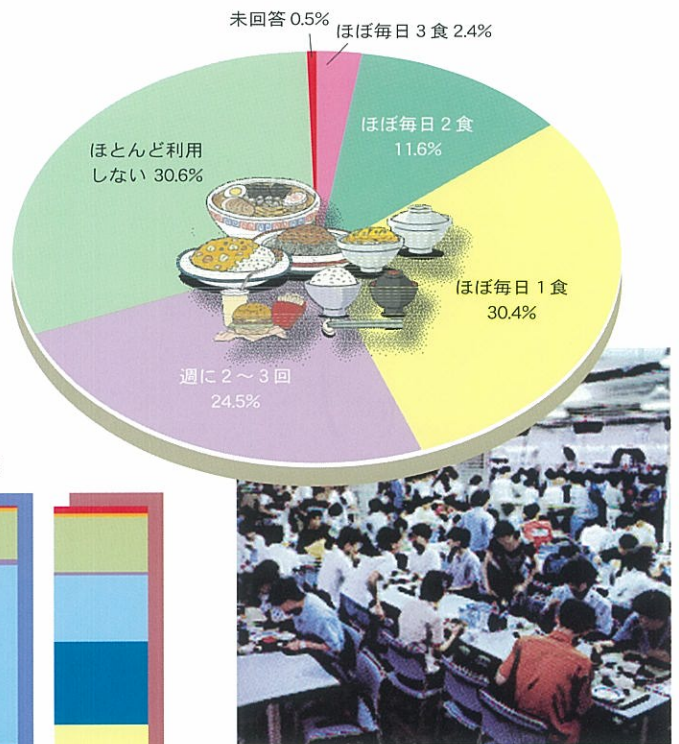
## G. 食事

### 学内食堂の利用状況



#### 5人に1人は朝食抜き、昼食は学内食堂利用者が50%

朝食を摂らない学生の割合は19.2%と前回調査(23.9%)より若干減少した。また、昼食については学部生及び大学院生の5割が学内の食堂を利用しているが前回6割の利用からは減少しており、その分《コンビニ》利用者の増加傾向が窺える。夕食については《自宅》および《自炊》が学部生で55.9%、博士課程学生で47.5%に対し、修士課



程学生では40.1%とやや低く、その分、修士課程学生は《学内食堂》と《学外食堂》の利用割合が高かった。学内食堂をほとんど利用しないと回答した者は学部学生の25.9%(前回18.1%)、大学院生では修士課程学生で31.6%(前回25.8%)、博士課程学生で35.0%(前回32.5%)であり増加の傾向である。その理由として約30%が昼食時に食堂が混んでいると答えた。また、その内の18%が「おにぎり等で済ませたい」としている。

## H. 耐久消費財

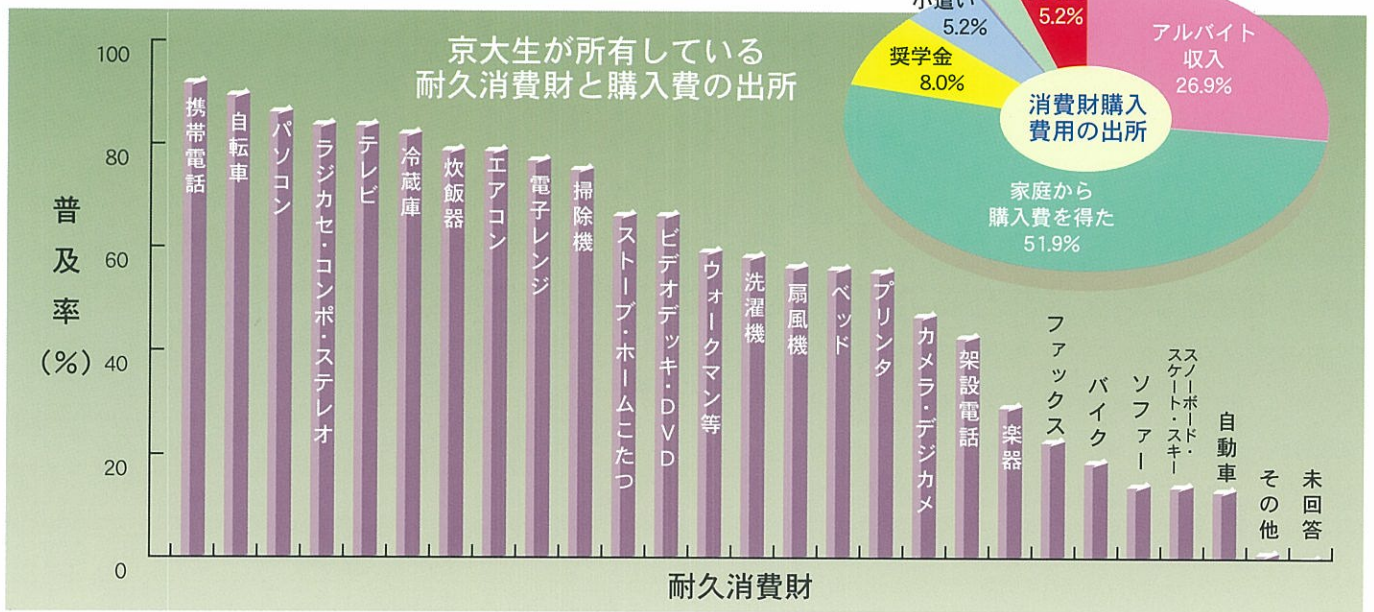


#### 携帯電話の所持者が全体で92.5%。ネット接続は67%

携帯電話の所持者が、前回調査の86.9%から92.5%へと増加した。特に学部生では94.4%であり、ほとんどの者が携帯電話を所持していると思われる。その他《パソコン》が86.9%(前回81.8%)、《自転車》が90.1%(前回88.0%)であり、これらが京大生の必需品といったところか。今回項目に追加した《プリンタ》は55.8%であった。また、インターネット接続についても尋ねたが、パソコン所持者の内77.3%が接続しており、その内の半数が高速回線の利用者であった。インターネットでつながり家電製



品に囲まれた快適な一人暮らしを行っている様子が窺える。これらの耐久消費財の購入費用の出所は《家庭から》が全体で51.9%、学部生では70.0%となっており、《家庭》からの支援に大きく依存している。

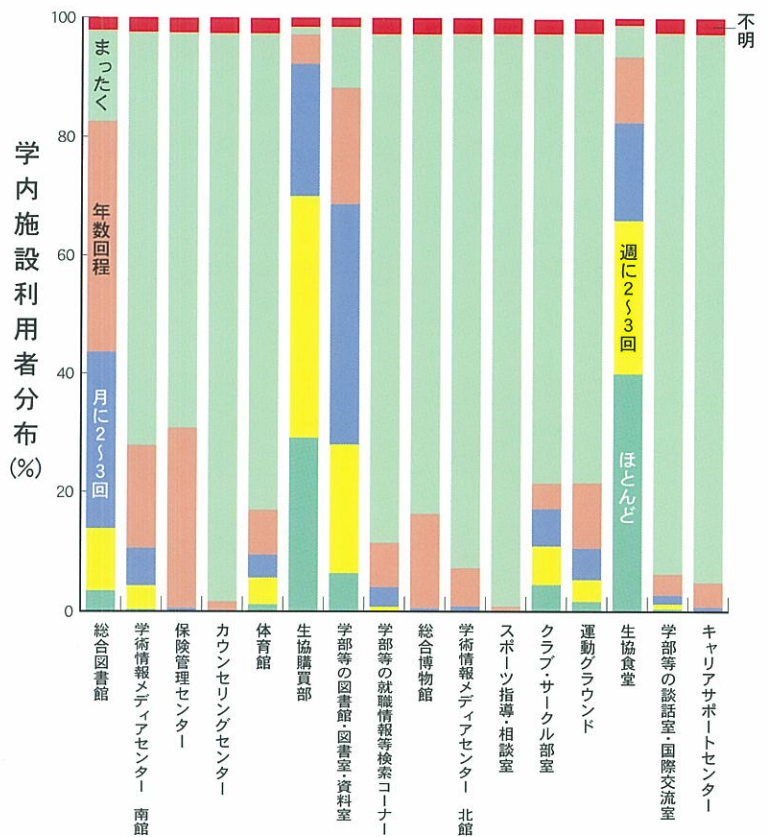


## 1. 学内施設の利用



### 利用頻度が高い生協と図書施設

京大生が《ほとんど毎日利用する》、《週に2～3回程度利用する》《月に2～3回程度利用する》と回答した学内施設では、学部生、大学院生を問わず《生協購買部》が92.3%、《生協食堂》が82.5%と高く、キャンパスライフにおいて生協が大きな役割を果たしていることが窺える。また、総合図書館を利用する学生については全体で43.6%であり、うち《月に2～3回利用する》が全体で29.8%、学部生では39.8%と多くの学生が利用している。また、《学部等の図書館・図書室・資料室》を利用する学生は全体で68.7%と最も多く、図書館の利用頻度が高いことも特徴として挙げられる。《クラブサークル部室》、《運動グラウンド》は約20%が利用している。一方、《保険管理センター》、《カウンセリングセンター》、《総合博物館》、《キャリアサポートセンター》、《スポーツ指導相談室》は1%未満、《学術情報メディアセンター南館・北館》、《体育館》、《学生部の就職情報検索コーナー》、《学部等の懇話室・国際交流室》は約10%の利用にとどまっており、これら施設の利用促進に向けた検討が必要である。

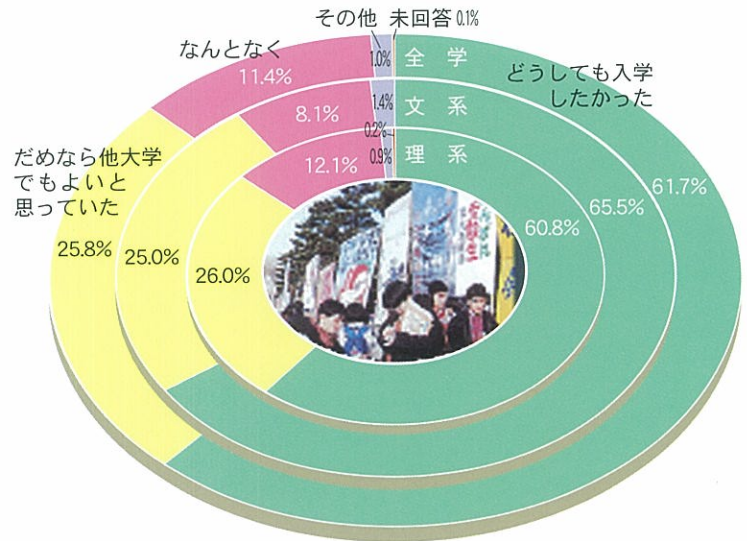


## J. 入学と学業



### 「どうしても入学したかった」京大生は60%超

《どうしても入学したかった》と回答した京大生は学部生で57.8%（前回59.7%）、修士課程学生で62.3%（前回60.5%）博士課程学生で66.8%（前回71.9%）であった。入学の主な動機としては、《京都大学の伝統や雰囲気憧れていた》を第1位に挙げたものが全体の18.5%と前回に比べ減少している。学部生では《社会的評価が高い》を挙げたものが2番目に多かったが、修士課程学生では《就職する前にもっと深い専門知識を身につけたかった》、博士課程学生では《スタッフ・設備が優れている》が第1位に挙げられており、前回と同様に学部生と大学院生では入学動機に差が認められた。

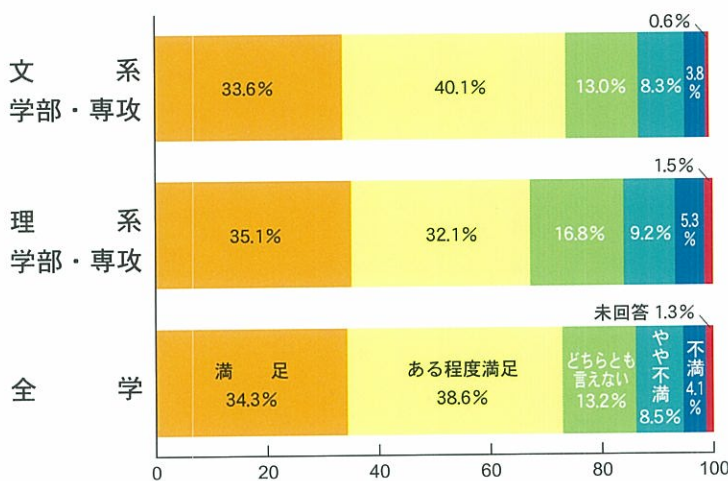


### 京都大学・大学院への入学希望度

学部・学科・専攻等を選択するのに重視した判断基準を問う設問に対しては、《自分が惹きつけられた学問分野である》が第1位と回答した者は学部生、大学院生とも約70%であった。一方、《国際交流が活発である》が第1位と回答した者は1%程度にとどまっている。2番目に重視した点については《最先端の学問が学べる》を挙げたものが学部生、大学院生とも約20%で、学部・学科・専攻等の選択に動機として当該学問領域への関心が高いことが窺える。《学部・学科・専攻等の教員に魅力を感じる》や《社会の役立つ分野である》、《将来なりたい職業に就くのに必須の分野である》もそれぞれ約18%であった。



### 在籍中の学部・学科・専攻に満足している京大生は70%を超える



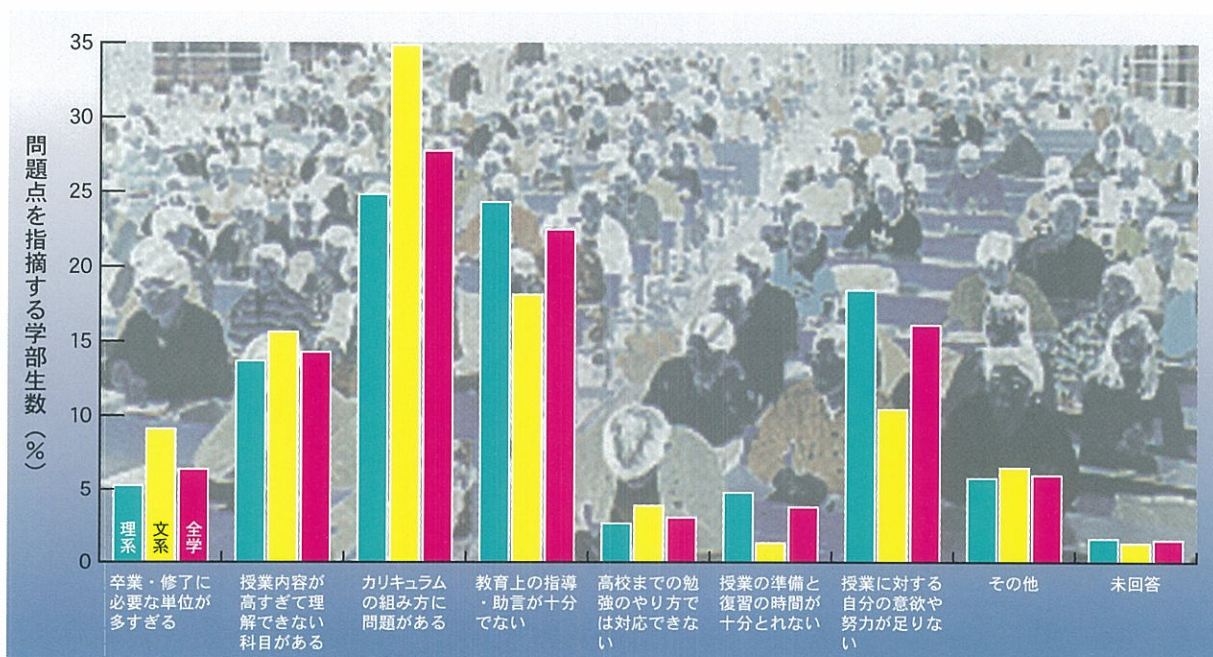
在籍中の学部・学科・専攻に対する満足度は前回調査とほぼ同様の傾向にあり、《満足している》、《ある程度満足している》をあわせた割合は京大生全体で72.9%（前回75.1%）であった。一方で、《やや不満である》または《不満である》と回答した者が12.6%（前回11.8%）おり、学部生より大学院生が若干その割合を高めた。また、《入学するときに将来の進路を決めていましたか》という設問に対しては、《決めていた》または《ある程度決めていた》と回答した者が京大生全体では67.5%（前回67.4%）であり、大学院博士課程の学生に限るとこの割合は74.7%（前回76.9%）と前回とほぼ同様の結果となった。

### 学部・学科・大学院専攻に対する満足度 (%)



## 現行のカリキュラムに対する満足度は変わらず

学部生のみを対象とした現行のカリキュラムに対する満足度の調査結果では、「満足している」または「ある程度満足している」と回答した者が39.3%となり、前回調査での41.2%に比べやや減少した。一方、「やや不満である」または「不満である」と回答した者は前回調査の29.2%から32.2%へとやや増加した。また、「現行のカリキュラムが消化できるか」という設問に対しては「できる」と回答した者が38.9（前回33.9%）、「ある程度できる」と回答した者が36.3%（前回38.2%）であり、合計すれば前回の調査に比べ割合が増加している。現行のカリキュラムについて改善すべき点を3つ上げてもらったところ、第1位に挙げた項目の中で「カリキュラムの組み方に問題がある」が27.4%と前回の20.0%から増加し、「教育上の指導・助言が十分でない」は22.2%で前回の23.2%よりやや減少した。残りの項目は2～3%の減少がみられた。今回の調査は Semester 制度が実施されてから初めての調査で、同制度の導入に伴う学部生の反応については、末尾の「O.その他」を見てほしい。



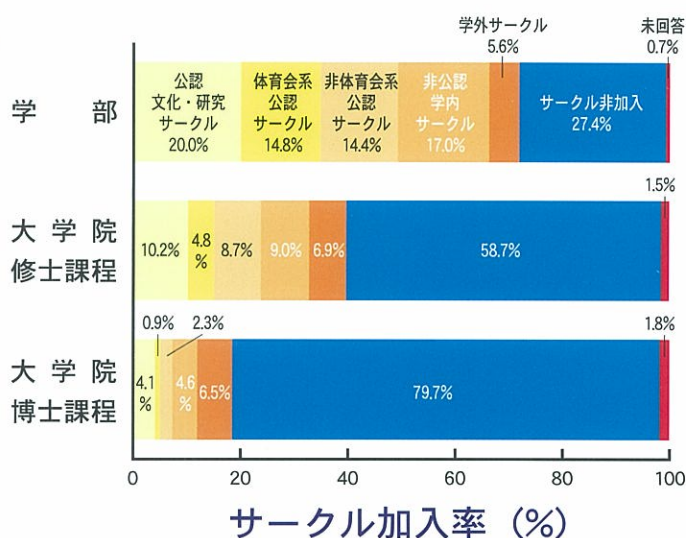
現行の学部カリキュラムの問題点

## K. サークル・ボランティア活動



### 学部生の約70%はサークル活動に参加

学部生の71.9%（前回67.9%）は、学内または学外のサークルに加入しており、そのうち55.1%（前回44.9%）は1週間あたり5時間未満の活動に参加している。サークルの種別では「スポーツ」が53.6%（前回53.0%）であり、「芸術・芸能」14.9%（前回20.0%）、「趣味」9.8%（前回10.5%）の順に多かった。サークル加入の理由として主なものを2つを挙げる設問に対しては第1位に「活動内容が好きだから」を挙げた者が56.2%（前回58.0%）とほぼ半数を占めた。また、第2位では「友人を得るため」と答えた者が31.5%とトップの結果となった。



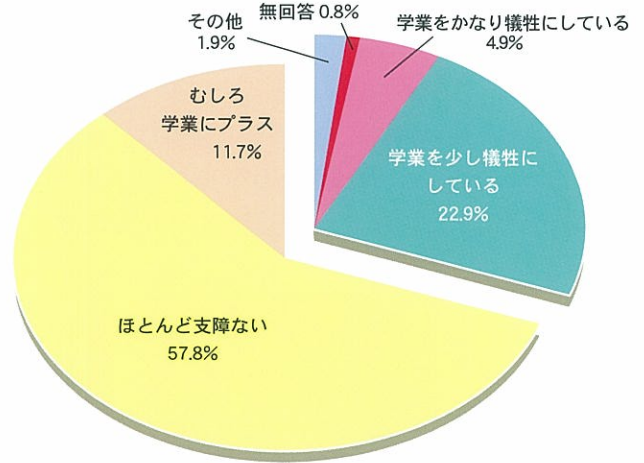


## サークル活動は学業の妨げにはならない



サークル活動と学業の関係では、《ほとんど支障はない》または《むしろ学業にプラスになっている》と回答した者が全体の69.5%（前回66.6%）であり、《学業をかなり犠牲にしている》と回答した学部生の割合は4.9%と前回調査(5.3%)に比べやや減少していた。一方、サークルに加入しない主な理由を2つ挙げてもらったところ、第1位に《時間的に拘束されたくない》あるいは《時間

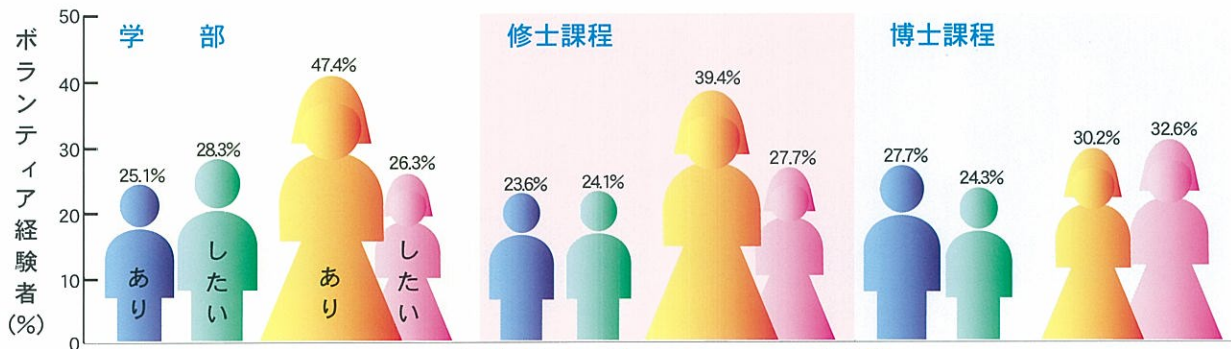
がない》を挙げた者が42.7%（前回41.1%）とやや増加となった。また、《学業の妨げになる》と回答した者は学部生で6.6%（前回9.4%）、大学院学生で14.8%（前回19.2%）と減少の傾向となった。



サークル活動と学業の関係

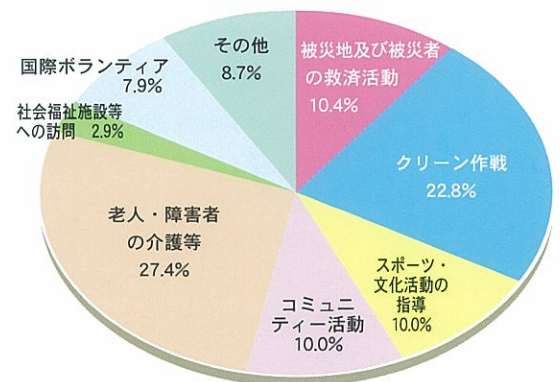


## ボランティア活動を京大生の約30%が経験



京大生のボランティア経験

京大生の約30%がこれまでにボランティア活動を経験している。活動の内容としては学部生では《老人・障害者の付添人(介助を含む等)》の体験者が多く34.1%（前回16.8%）と大きく増加した。次いで《クリーン作戦》が25.6%（前回34.7%）となり、前回調査の1位と2位が逆転した。一方、大学院生では《老人・障害者の付添人(介助を含む等)》が23.2%（前回20.5%）、《クリーン作戦》が21.9%（前回17.9%）《スポーツや文化活動の指導》が14.2%（前回8.6%）《被災地域及び被災者の救済活動》が12.9%（前回23.8%）、などが中心であり、学部生と大学院生では経験したボランティア活動の内容はほぼ同じ結果となった。ボランティア活動に従事した回数では《年に数回》が全体の71.0%を占めたが、《月に1～2回程度》従事した者も14.9%いた。また、ボランティア体験の感想としては《人生(社会)経験が得られ有意義であった》が全体で66.8%（前回66.3%）、次いで《自分自信の興味を満たした》が12.9%（前回16.5%）となり全体の約80%を占めていた。

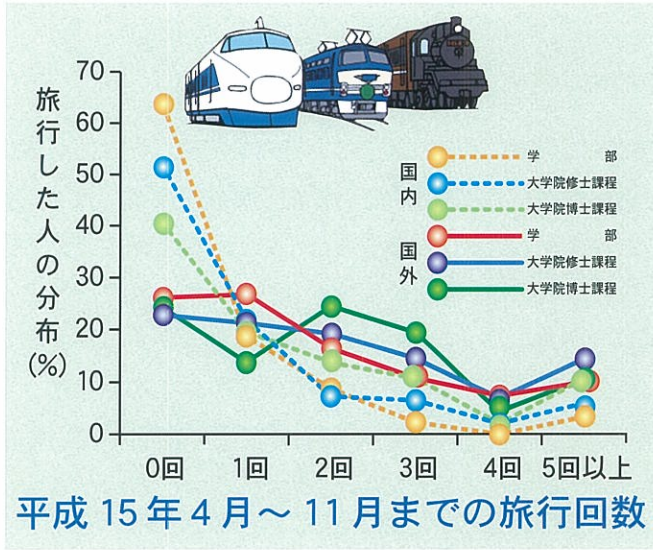


ボランティア活動の内容

## L. 旅行



### 大学院学生の旅行目的は国内外の学会参加が主流



学部生、大学院生とも4人中3人は1泊以上の国内旅行をしており、大学院生ほど旅行回数が多い傾向にあった。また、海外旅行については学部生33.7%、修士課程学生46.1%、博士課程学生57.6%が行っており国内旅行とほぼ同じ傾向となった。旅行目的では学部生の場合は、ほとんどが《観光》、《課外活動》のための国内旅行であるが、大学院生では、特に博士課程学生の場合はほぼ半数が《学術調査》、《学会参加》を旅行の第1目的として挙げているものが51.8%となった。また、海外旅行の目的に関しては、学部生、修士課程学生の約70%は《観光》を第1目的としていた。また、学部生の10%は《語学研修》、《留学》を第1目的として挙げている。博士課程学生では《学術調査》、《学会参加》を第1目的としたものが45.4%で、《観光》の45.4%と同数となった。

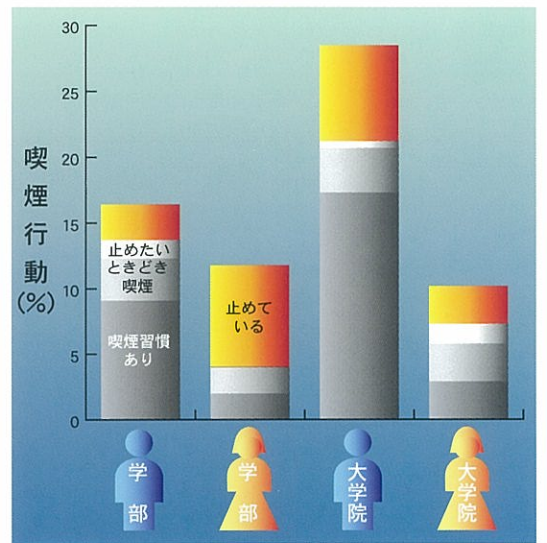
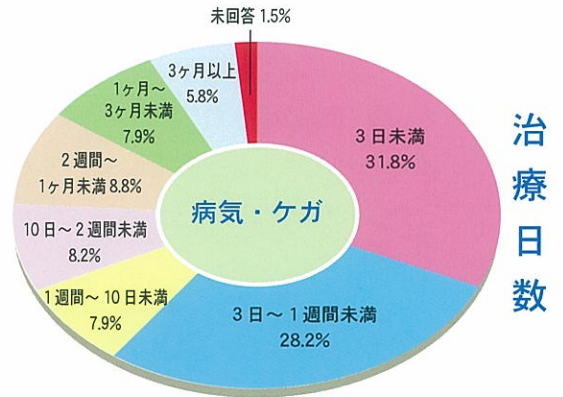
旅行した地域で最も多かったのは《アジア》36.7%で次いで《ヨーロッパ》28.6%、《北米》19.1%の順となった。全体的に総ての項目で前回の調査とほぼ同じ傾向となった。

## M. 健康・悩み



### 京大生の非喫煙者の割合は85%

京大生の約40%が病気やケガをしたが治療に《学内医療機関》を利用したものは6.7%（前回7.9%）であり、《学外医療機関》を利用したものが43.0%（前回48.4%）、《休養のみ》あるいは《市販薬》ですませた者が46.6%（前回42.4%）であり、病院には行かず家で治す傾向となった。また、病気やケガの原因としては《不規則な生活》23.0%が最も多く、次いで《特に思い当たらない》19.1%、以下《心労(精神的疲労)》14.2%、《スポーツ》12.7%、《事故》10.6%の順であった。この中で、大学院生の6人に1人が傷病の理由として《心労(精神的疲労)》を挙げており、前回の調査では4人に1人であったので多少改善されているが、今後も気になる点である。京大生の約60%は健康維持のために何かをしており、その第1位は《バランスのとれた食事》19.1%、次いで《球技(野球・サッカー・バドミントンなど)》15.7%であった。喫煙に関しては、《喫煙の習慣がある》、《ときどき喫煙する》あるいは《喫煙するが、できれば止めたい》と回答した者は京大生の約15%で前回の調査より5%減少している。さらに、学内に禁煙場所と喫煙場所を設定することについての設問に対しては《全面的に禁煙にすべきである》と回答した者が33.4%（前回31.8%）、《禁煙場所と喫煙場所を分けることに賛成》の者が60.9%（前



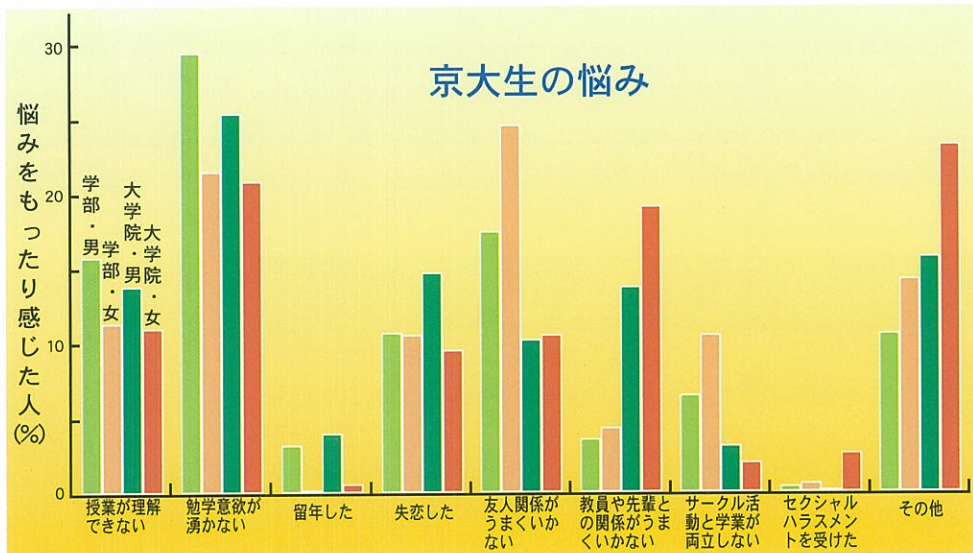
喫煙者分布

回 64.1%) あり、健康に有害なタバコを避けようとする姿勢が窺える。《京都大学学生健康保険組合》への加入者は 71.7% (前回 68.7%) でやや増加の傾向、《学生教育研究災害傷害保険》への加入者は 64.2% (前回 55.2%) で増加の傾向であったが、これらの制度を知らないと答えた者が保険組合で 8.7%、傷害保険で 12.1% いた。また、《学生総合共済(生協)》へも全体で 43.0% の学生が加入している。



## 悩み事の相談相手は友人・先輩

学部生のうち、入学後に何らかの悩みを抱いたことが《ある》者が 65.9% (前回 63.3%)、悩みを《感じたことがある》者が 17.0% (前回 17.3%) いて、これらを合わせると 80% 近くになり、前回調査とほぼ同じ傾向である。大学院生でも学部生よりは若干割合が低いものの、約 50% の者が何らかの悩みを抱いた経験をもっている。悩みの中で第 1 位に挙げている最も多い回答は《勉強意欲がわからない》であり、学部生 28.1%、修士課程学生 30.6%、博士課程学 15.0% ともに同じ傾向である。次に多いのは学部生では《授業が理解できない》17.4%、《友人関係がうまくいかない》15.2% に悩んでおり、修士課程学生では《失恋した》12.7%、博士課程学生では《研究室の教官や先輩との関係がうまくいかない》14.3% の悩みとなっている。一方、悩みの相談相手として第 1 位に挙げているのは《大学内の友人・先輩》54.2% (前回 53.4%)、《大学外の友人・先輩》17.6% (前回 24.3%) を挙げるものが多く、学部生では《大学の教員》、《学生懇話室》、《医師・カウンセラー》を相談相手に上げたものは実数で数人しかいなかった。学内にはカウンセリングセンターを中心とした相談窓口が整備されているので、是非ともこれらの施設を利用して欲しいものである。

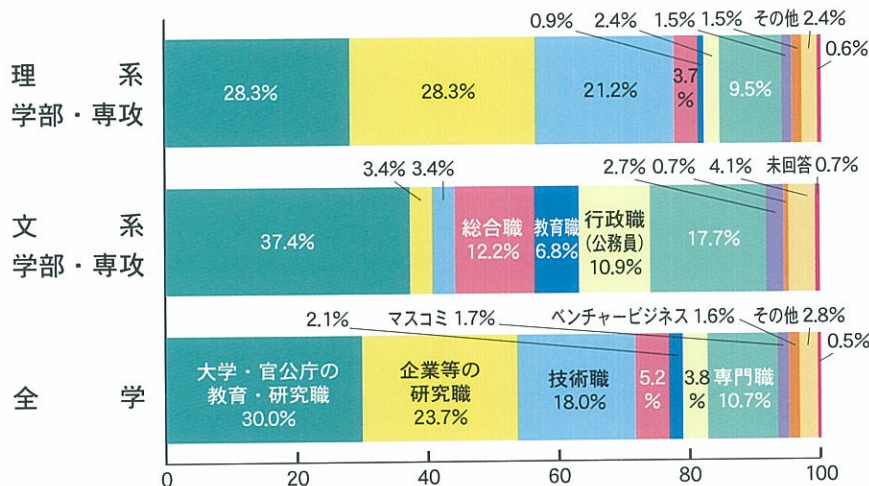


## N. 進路 (進学・就職)



### 学部生の約 70%、修士課程学生の 25% が進学希望

希望する職種 (%)



学部生の 67.4% (前回 59.2%) は大学院修士課程への入学を希望しており、就職を希望する学生 26.7% (前回 30.1%) を大きく上回っており、就職よりも進学する傾向である。修士課程学生の 26.5% (前回 31.8%) は博士課程への進学を希望しているが、就職を希望する学生は 69.0% (前回 62.1%) であり、この結果から進学せずに早く就職しようと考えている学生が増えたと思われる。

また、博士課程の学生の14.3%（前回18.1%）は外国の大学・大学院への留学を希望している。学部生の就職希望職種として《企業等の研究職》24.4%（前回19.2%）、《技術職》21.9%（前回17.6%）が上位になり、前回1位の《大学・官公庁の教育・研究職》17.0%（前回20.7%）は3位に後退した。一方、最も少なかったのは《ベンチャービジネス(起業家)》を希望するもので、前回調査と同様に学部生、大学院生を問わず実数で数名程度しかいなかった。就職にあたっては《自分の特技・能力や専門知識が活かせる》ことを第1位に挙げる者が46.7%（前回51.2%）とほぼ半数であり、《華やかで世間からもてはやされる》ことや《社会的な地位・名声が得られる》を重視する者は前回の調査と同様に数名しかいなかった。さらに、「もし理想の仕事や職場を選ぶとすれば、どのようなことを重視するか」という設問に対しては42.0%の者が《やりがい》を挙げており、次いで《給料がよい》13.6%、《能力を発揮できる》12.6%の順で前回とほぼ同様の結果となった。就職する地域については、42.1%の者が《地域を問わない》と回答しており、《京阪神地区》と回答した者が35.5%、《首都圏》と答えたものは11.6%であった。これも前回調査と同じ結果となった。

## 0. その他

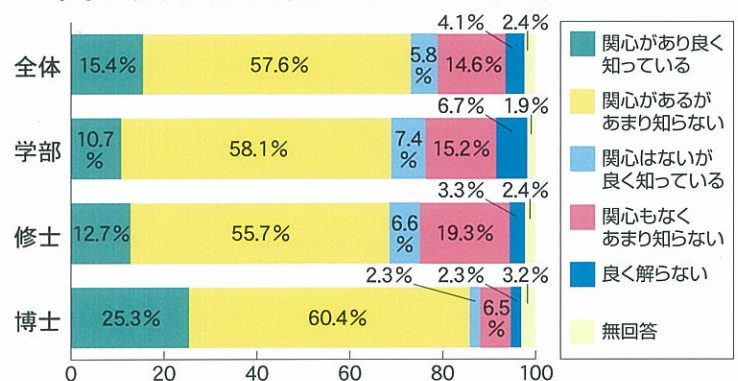


### 国立大学の独法化を知らない学生が約70%、 Semester制導入後のカリキュラム満足度が変わらない学生が約35%

国立大学の独立法人化について関心がある学生は73.0%で、このうちの57.6%が法人化についてあまり知らないという回答をした。また、関心もなくあまり知らない学生は14.6%で学生には国立大学法人化はあまり伝わっていないという結果となった。さらに、Semester制導入後のカリキュラム満足度で《変わらない》を答えた学生は36.0%で無回答を含めると約80%が良くも悪くもないと答えた。同じくカリキュラム消化度も《変わらない》を答えた学生は43.0%で無回答を含めると約80%が良くも悪くもないと答えた。

Semester制導入に伴い変更されたアカデミックカレンダー（学年歴）について《影響がなかった》を答えた学部3年次以上の学生は33.1%で無回答を含めると約75%が不都合は感じなかったという結果となった。

国立大学法人化について（%）





## 京都大学学生生活白書

平成 15 年度《学生生活実態調査》のまとめ—概要—

---

平成 17 年 2 月 発行

編集 平成 15 年度《学生生活実態調査》ワーキンググループ  
委員長 小林潔司 (工学研究科教授)  
委員 赤松明彦 (文学研究科教授)  
木南 敦 (法学研究科教授)  
山本裕美 (経済学研究科教授)  
木原正博 (医学研究科教授)  
宅田裕彦 (エネルギー科学研究科教授)

発行 京都大学学生部

〒 606-8501 京都市左京区吉田本町